ローマ１０：１２－１７「宣教への派遣」

*遣わされないで、どうして宣べ伝えることができよう。「良い知らせを伝える者の足は、なんと美しいことか」と書いてあるとおりです。*

はじめに

わたしは救世軍士官になりまして今年で２１年目になります。なんで救世軍士官になったのか？　まだ神保町に古い神田中央会館がありました頃、万国本営からマリオン中将という方が派遣されて来られて、「美しい足」について説教なすったのです。そのお話し。美しい足のお話しを聞いている最中に、わたしは神様からの語りかけを聞いたのです。いわゆる召命というやつであります。それは疑うべくなく、はっきりしたものであった。で、美しい足のお話しっていうのは、後の方で説明いたします。

わたくしが今日みなさまにぜひともお伝えしたい第一のことは

１　信じる者はだれもみな救われる

・・・ということであります。パウロが今日の聖書ではっきりこう述べておるとおりです。第１３節「主の名を呼び求める者はだれでも救われる」　これであります。

いったい救われる、ということは非常に難しいことであります。救われた、という実感を与えんがために、いろいろの宗教がございます。わたくしは中学生のとき祖父を亡くしまして、生まれて初めてお葬式というものに出た。「人間、死んだらどうなるんだろう」ということを、真剣に思い悩むようになった。死んだらどうなるんだろう。これは、墓の向こう側における悩みであります。学校に行けばいじめられる。これは、墓のこちら側における悩みであります。墓のあっち側の悩みと、墓のこっち側の悩みにサンドイッチ状態になって、その苦しさと言ったらありません。

そこで、救いを求めて、わたしは仏教に道を求めました。ダンマパダ、スッタニパータ、般若心経、龍樹菩薩の中論の興、維摩経、阿弥陀経、涅槃経、法華経、理趣経、いろんなお経を読みましたが、理解が足らなかったんでしょう。救いがわかりませんでした。それで、仏教に飽き足らず、ヒンズー教、イスラ

ム教、神道、ヒッピー、オカルト、錬金術、黒魔術の世界までわけ入って行きました。で、わたしが感じましたことは、これはタマネギだ、ということであります。救いを求めて一枚皮をめくる。するともう一枚皮がある。救いを求めてもう一枚皮をめくる。するともう一枚皮がある。救いを求めてさらにもう一枚皮をめくる。するとやっぱり皮がある。ずっと皮をめくっていきますと、最後は真中が空っぽになっているのであります。これは中学生の意見というだけでない。渋澤龍彦の研究をしているフランス文学者の中田健太郎という人も、同じようなことを言っている。

ことほどさように、救われるっていうのは、なかなか難しいことであります。

最近の若い人だったら「救いなんて無いんだ、っていうことに気づくのが救いだ」なんて、かっこいいことを言うかしれません。しかし、わたしはどうもあきらめが悪かった。救われたくて、救われたくて、しょうもなかった。そうして、あるきっかけから救世軍に導かれたのです。

救世軍に行ってみて、たまげました。「信じる者はだれでも、みな救われる」という。それだけだ、と言うのです。もっと深遠な真理があるだろう。もっと複雑な説明があるだろう。もっと奥深い奥義があるだろう。いや、そうではない。神の子、救い主イエス様が、あなたの罪を身代わりにかぶさって十字架で死んでくだすった。三日目に復活して永遠の命を授けてくださった。信じなさい。それを信じなさい。そうしたら救われる。それだけだ。それで全部だ、と言うのです。

タマネギの皮をむくのに疲れ果てていたわたしは、単純にイエス様を信じてみる気になりました。そうして、信じたら、救われました。言葉をかえれば、救われたんだという実感が本当に心の底から湧き上がってまいりました。ああ、わたしは救われたんだ、というのが自分でわかる。「なんでわかるんだ」と言われたって「わかるんだからわかるんだ」としか言いようのない世界である。こうしてわたしは救われました。昨日もイエス様に救われました。今日もイエス様に救われてます。明日もイエス様が救ってくれます。これは間違いないことです。ハレルヤ！

「主の名を呼び求める者はだれでも救われる」というのは、わたしの個人的な体験に照らせば、ほんとうのことであります。

わたくしが今日みなさまにお伝えしたい第二のことは

２　聞くことができなければ信じることができない

・・・ということであります。

救われる、ということはいろいろ難しいようであるけれども、イエス様を聞いたなら、それは単純で明快であります。わたしの罪を、イエス様が身代わりにかぶさって十字架で死んでくだすった。三日目に復活して永遠の命をわたしに授けてくだすった。これを、本気で信じるなら、救われるのです。

本気で信じれば救われる。しかし、聞くことができなければ、信じるということはできない。まず聞いて、それから、信じるということが起こる。聞かなかったら、信じることができない。パウロが今日の聖書で、「信じたことのない方を、どうして呼び求められよう。聞いたことのない方を、どうして信じられよう。また、宣べ伝える人がなければ、どうして信じられよう」（１４節）と言うておるとおりであります。

さて、わたしには、イエス様を聞く機会が、信じるまでに都合５回ほどありました。

第１回は、カトリックの幼稚園でシスターがイエス様の話しをしてくれました。電気を消した真っ暗な部屋の中で、イエス様の両手両足が十字架に釘づけられて、頭にいばらのかんむりをかむせられて、血が流れたという、おそろしい話しを聞かされました。５歳です。半分も理解できませんでした。

第２回は、小学校６年生のとき思い切って訪ねた無教会派のテープ礼拝です。９０歳ぐらいのお年寄り１０人ほどがテープのお説教を聞いていました。むずかしくってぜんぜん理解できませんでした。聞いたら、そこにいるお年寄りは全員、東大の卒業生ばっかりということでした。どうりでむずかしいわけだ。ほうほうのていで逃げ出しました。

第３回は、カトリック教会のミサに出たときだ。式文のページがみつからなくって、かけあいの合い言葉みたいのがどうも上手く言えなくって、汗びっしょりになって、あたふたしているうちに、神父様のお説教になった。野球の話しでした。気まずくって、もう行きませんでした。

第４回は、ビリー・グラハム先生の後楽園球場での大伝道集会でした。説教はよくわかりました。招きへの時間になったので、まっさきにグランドに降りて行きました。日本で最初の人工芝が後楽園球場に入ったばかりで、当時の中学生は誰も人工芝というものを触ったことがなかった。グランドに降り行って、人工芝に触ってから、回心のお祈りに導かれました。動機が不純であったので、長続きしませんでした。

第５回は、救世軍です。ビリー・グラハムの事務局から救世軍に行きなさい、と地図の描いた案内状が届きました。一年ぐらいたって行ってみました。軍服みたいなのを来た人たちが、かわがわる立って、イエス様のお話しをしてくれました。いや、もちろん、証しの時間に旅行の報告をする人がいた、手術でお腹を切った話しをする人もいた、電車賃をけちって克己週間に献金したという人もいた。それはなんだかよくわからなかったけども、しかし、基本線は外れていなかった。だいたいどの人も単純明快に話してくれた。イエス様が、神の子、救い主イエス様が、あなたの罪を身代わりにかぶさって十字架で死んでくださった。三日目に復活して、永遠の命を授けてくださった。信じなさい。それを信じなさい。そうしたら救われる。信じたら救われる。

第５回目にして、わたしはようやくわかったのです。どうやったら救われるのか、何を信じれば救われるのか、どのお方を信じれば救われるのか、それが、はっきりわかったのです。

それはつまり、第１回目に話しをした人の話し方がまずかったから、わたしは救われなかった、ということなのか。そうじゃあないと思います。第１回目の人は、確かに神様から与えられた福音宣教の責任を果たしたのです。おかげで、わたしの心の中に福音を受け入れる土台が据えられた。２回目、３回目、４回目の人は、やっぱり話し方がまずかったから、わたしは救われなかった、ということなのか。そうじゃあないと思います。土台の上に、床をはり、柱を据え、屋根をふき、壁をつけてくれたのだ。２回目、３回目、４回目の人たちも、確かに神様から与えられた福音宣教の責任を果たしたのだ。だから５回目の救世軍が、信仰の家を完成できたんじゃないか。わたしはそういうふうに理解しています。

ところで、第１回目の人が、おじけづいて何にも話しをしなかったら、どうだったんだろう。こんな幼稚園の子どもに十字架の話しをしたって、どうせ通じ

るわけがない、と諦めていたらどうだったんだろう。２回目、３回目、４回目の人たちが、つかれていて、いそがしくって、気分がのらなくって、どうせやっても無駄のように思われて、同じように諦めていたら、どうだったんだろう。聞くことができなかったら、信じることはできませんから、きっとわたしは今頃救われていなかったでしょう。墓のあちら側の悩みと、墓のこちら側の悩みで、サンドイッチになって、いまだに暗い顔をしていたことでありましょう。

むすび

最後に、マリオン中将が神田中央会館で話した「美しい足」のお話しを説明いたします。マリオン中将は説教をこう結ばれた。ビルマの山奥の救世軍士官は、まずしくって、まずしくって、靴を買うお金がない。だから、いつでも裸足で歩いている。イエス・キリストの福音を宣べ伝えるために、山奥のあちらの村、こちらの村に、裸足で歩いて行って伝道する。足は泥だらけ、岩にぶつかって傷だらけ、根っこにひっかかってアザだらけだ。なんと汚い足だろう。だが、主イエス・キリストはおっしゃるのだ。それは世界で一番「美しい足」だ。なぜなら、福音を聞いたことの無い人々に、福音を聞かせて歩き回る足だからだ。さて、おたずねするが、あなたの足は「美しい足」だろうか？　あなたも自分の足を、主にささげるべきではないか？

マリオン中将がたずねておりますことは、足を切って差し出せ、ということではない。あなたの全存在を、主イエスキリストにおささげして、永遠の命の福音を人々に伝えるために生きなさい、ということであります。

わたくしが今朝みなさまにおたずねしたいのは、これとまったく同じであります。すなわち、あなたの足は「美しい足」だろうか？　あなたも自分の足を、主にささげるべきではないか？

そうだ、そうするべきだ、とお感じになるのなら、それは主があなたを福音宣教に召していたもうからです。そうだ、そうするべきだ、とお感じなった方は、どうか恵の座に進み出ていただきたいのです。もちろん、足を切って差し出せ、ということではありません。それは、あなたの全存在を、主イエスキリストにおささげして、永遠の命の福音を人々に伝えるために、ぜひとも生きていただきたいのです。お祈りいたしましょう。